

# ライフケアガーデン熱川 本館

**症 例 概 要** 入居者：70代 女性 要介護1 認知症

経過：60歳頃から別荘として所有していたI市のマンションへ移住しご主人とともに悠々自適な生活をされる。数年前から認知症状が進み、もの取られ妄想やご主人に愛人がいると思ひ込み警察へ電話することなどがありました。

2022年7月にご主人が肺がんで他界すると独居生活が困難となる。長男は父親の会社を急遽引き継いだため多忙であり、長女は国際結婚してアメリカ在住でご家族の介護力は皆無でありました。

長男がホームページで当施設を知り、ご本人とともに見学したことから8か月程前に入居することとなりました。

## 内 容

元々は多趣味かつ社交的でテニス、コーラス、麻雀など様々なサークルに参加しておりご友人も多い方でした。しかし、認知症が進行すると趣味やサークル活動から遠ざかり、外出をしなくなることでご友人たちとの交流も途絶えていきました。ご主人ががん治療を始めてからはゴミが部屋に散乱し悪臭を放っている状態で、近隣の知人が生活のお世話をしていました。そんな状況のため急遽、当施設への入居となりました。入居してからも戸惑いと不安な表情がみられており、10分前のことを忘れてしまう等の短期記憶の低下も顕著に現れ始めました。

子供たちは遠方で多忙な生活を送っており、ご主人は他界、ご自身は孤独感と不安な表情が常にあり、1日の大半を1人で居室にて過ごし、ご主人の写真を眺めたり海外で暮らす娘夫婦と孫の写真を見て寂しさを紛らわせていたりしていました。時には「娘をアメリカに行かせたのは失敗だったのかね」と呟いていました。

そこで、職員はご入居者同士の交流を図るとともに、一緒に外出することによって孤独感を和らげ、不安軽減につなげようとしてきました。

居室の近い入居者さんに声をかけ、『かるた取り』に白熱したり、当施設近くにできた『レストラン』へ一緒に行ったり、『海』を見に海岸線をドライブする等の企画を立案し実施しました。

交流する入居者さんの中にはご自身と同じくご主人を亡くされた方もいらっしゃいました。同じ境遇であることから会話が弾み、結婚生活の思い出をお互いに話すこともありました。

元々好奇心旺盛であり、身体を動かしたり人と話をすることが好きだったため次第に安心と明るさが現れてくるようになりました。『秋の運動会』では1着となり嬉しさと笑顔がこぼれていました。

今では周囲との交流を楽しみに生活されています。また、外出やイベントのお話をすると嬉しそうな表情をみせていただけるようになりました。

入居者さんの孤独と不安に寄り添い、入居者さん同士の交流を企画、実施することで明るい性格を取り戻しキラキラした笑顔がたくさん見られるような事例となりました。